

現代社会と後期青年期問題

岩見 和彦

1. はじめに

どの社会でも諸機能システムの継続には、確実かつ安定的な世代交代が期待されている。ところが今、年長の若者世代（20代～35代前半）の中に、従来の社会的モラトリアム期間を越えても実社会にうまく着地しない層が顕在化してきた。

日本社会の経済的基盤の維持、ひいては社会システムの人的要素の再生産そのものに深刻な影響をもたらすとの危機感をベースに、これまで「モラトリアム期間の（長期の）延長」「成熟拒否」「社会化不全」といった言葉で記述、説明されていた青年期の問題が、今いっそうの広がりと深刻さを増しているというのが大方の見方である。診断だけでなく具体的な処方早期実行こそが求められているのではないか、という声も日増しに高まっている（例えば、玄田 2001, 小浜 2004, 橘木 2004）。それを受け雇用政策、教育改革、キャリア支援策など様々な領域での施策の必要が説かれ、この問題はにわかに全社会的問題として注目を集めているのである。

このような社会政策的な視点からの問題指摘が、若者たちにまったく届いていないかと言えば、そうとは思えない。現実主義的な人生の選択が「大人になる」ということだぐらいは、当人たちも知っている。でも、それを今はしない、できない。そんなディレンマを抱えた「私」が、実社会との接点を自分本位に縮減したり、回避あるいは拒否したりしながら、それでも自らの生の形を模索しているのだ。芹沢 (2002, 31頁)は引きこもり現象を引き合いにして、こうした事態を、制度が引き受けていた社会的モラトリアムが空洞化したことに伴う、モラトリアムの個人化とそ

の困難さにおいて捉えようとしている。

本稿では、後者の視点に立ちつつ、この問題が埋め込まれているもう少し基層的な事情にこだわってみたい。後期青年期問題が主として労働経済システムと雇用市場を土台として構造化されていることは間違いないにしても、この問題を真に問題たらしめているものを冷静に解読するためには、現代社会を成立させている地殻の様相（岩見 1998）と、当の若者たちの「自己社会化」（Luhmann 訳書 1993）のありようを複眼的に捉える必要があるからである。変動と流動化の激しい時代にあっては、若者は両親よりも「時代に似る」という言葉とともに（Bauman 訳書 2001, 168頁）。

2. 現代社会論の構図―〈個人化の徹底〉と〈大きな物語の終焉〉

社会は、人と人とのかかわりの網の目として記述できる。と同時にそこには、そうしたかかわりを通して分泌される人びとの振る舞いを意味づける文化が張り付いている。かりに前者を「かかわりのシステム」、後者を「意味のシステム」と呼ぶなら、今日多くの論者が説くところによれば、現代社会の特徴は、かかわりのシステムとしては〈個人化の徹底〉、意味のシステムとしては〈大きな物語の終焉〉という点にほぼ集約できるだろう。両者はむろん別のことではなく、互いに互いを前提としていることは言うまでもない。

個人化は近代化と同義である。近代社会にあって「個人化は宿命であって、選択ではなかった。個人に選択の自由はゆるされても、個人化を逃れ、個人化ゲームに参加しない自由はゆるされない」（Bauman 訳書 2001, 45頁）からである。しかし、今日のいわゆるポストモダン状況は、その徹底した個人化過程に晒されているという点で初期近代とは区別される。集団や組織へのアクチュアルな準拠の弱化は全領域に及び、家族や職業集団といった基礎的な中間集団が、各成員を剥き出しの個人にすることにブレーキをかけていた時代の場の力学さえも揺るがしている（武川 2004）。例えば、多様な形をとった近代家族像からの逸脱、あるいは頻繁な転職や容赦ないリストラなどの会社帰属の流動化といった事態が恒常化しつつあることが、それを物語る。政治システムもこの流れに棹さし、いっそうの「民営化・規制緩和」（Bauman 訳書 2001）を推し進めてもいる。

ここからむのが、もう一つの「大きな物語の終焉」という事態である。N. ルーマンが言うように、「機能的分化社会」における相互に分離した各機能システムが、それぞれのシステム維持のためのオートポイエシス（自己塑成、自己創出）を

発揮するとき、全体社会を取り仕切る大文字の原理を以前のように見出すことはできない。真理や進歩といった大きな物語に託された完全性、必然性の到来はもはや望めず、偶然性、不確実性、不安定性を常態とせざるを得ない。もはや望めないがゆえに、消滅した大きな物語を埋め合わせる何かを、人は求めたがりもする。N. ボルツのいう「意味に餓える社会」(Bolz 訳書 1998)とは、そうした(初期近代の)大きな物語の郷愁から解放されていない、未熟な社会と診断された現代社会のことである。このような観点からすれば、現代社会が迷宮であり現代人が迷子であるといった表現も許されるように思われる。

ポストモダン的と言われるこのような状況は、むしろ高度に消費化＝情報化した近代後期の「豊かさ」をバックにした現代資本制システムの「体質」と深くかかわっている。労働力・欲望の抽象化と自由化(見田 1995)、主体性・意味の揺らぎと流動化は、消費と情報に依存する近代社会の体質の原因であり結果でもある。したがって、資本制システムの自己創出過程として加速化するこの消費化＝情報化の動きも、個人化の徹底と大きな物語の終焉という「流体的近代」化(Bauman 訳書 2001)のより広範な進行の中で捉えられて、はじめてその意味が明らかになるはずである。消費と情報への欲望が、初期近代の変容によって欠いてしまったもの(堅固なアイデンティティや帰属すべき共同体)を代理物で埋め合わせるという機能を、ここでも果たしているからである。

本稿の狙いは、以上のような現代社会の素描を下地とし、その磁場に埋め込まれながら青年期の延長戦をさまざまな形で生きている同時代人たちの心理－社会的な生態を読み解くことにある。その際導きの糸になるのは、選択の自由、虚構のリアリティ、着陸不安、成熟困難といった相互に関連しあったキーワード群である。

3. 個人の「選択の自由」

3.1. 「ルンペンにもなれる自由」

個人化の徹底と大文字の価値の衰退は、世襲的身分や共同体的規範から解放された個人に、自由への果てしない希求とその切実さを植えつける。しかし、そのことは同時に、個人にこれまでにないほどの負荷をかけることでもある。現代人を解放すると同時に呪縛するこの個人の自由を、いささかもてあましているわれわれが確かにいる。

「いいわね。わたしたちは、芸術作品のつもりで、これまでにない本格的な計算

で、エリートをつくりだそうとしているのよ」「その子は、私たちの人生の最高傑作になると思うわ。同時に、それが子供にとっても、最大の自由を与えてやることになるのよ」(はじめから東大行きと決めておいて、自由なのかい)「自由よ。それでこそ、本当の自由人になれるのよ。だって、子供は、本来、自主性のないものなの。その子供が、成人していよいよ自主性を発揮しようというときになって、あそこへも行けない、こちらへも入れない、となつては、それこそ不自由ではないかしら」(……)「超一流大学を出ていれば、(中略)どんなこともできるわ。無限に選択のチャンスがあるわけよ。そのときこそ、子供は、『ほんとうの自由人にしてくれた』って、バンザイするわよ」(……)「その子が、今のあなたの係長さんのようになろうと、ルンペンになろうと、それは、子供が自由にその自由を行使した結果であって、子供自身の責任。子供だって、あきらめるわよ」(城山 1978, 33頁)〔文中の()は夫の会話部分、……は夫の沈黙を示す：引用者〕。

城山三郎が描いた1970年代の「素直な戦士たち」は、一言で要約すれば、「教育ママ」による早期英才教育の被験者であり、また犠牲者だった。しかし今から振り返ると、この小説にはもう一つ別の重要な問いが投げかけられているのに気づく。それは、主人公である母親が英才教育の正当性を理屈づけするために思わず発した、「ルンペンにもなれる自由」をめぐる問いである。この一見ラディカルな自由論の語り手は、小説では母親であり、当時の学歴神話の最も熱い信奉者たる親たちであった。

その後、成功・幸福を手に入れる手段としての学歴価値が相対的に下落した。それに呼応して今では、その意匠を変えつつも語り出される自由論は若者たち自身のものになっている。『トーキョー・フリータースタイル』という興味深いデータ本がある(マーブルブックス 2004)。ここで取り上げられている49人のほとんどがフリーターのメリットとしてあげるのが、身軽さ、責任回避、時間管理の自在さなどを内容とする「自由」なのである。フリーターになることで「自由な時間を買っている気がする」と回答する者もある。時間の自由をプラス価値とする姿勢は、フリー・アルバイターという呼称や就労形態からすれば同義反復でしかない。しかし、当人たちの価値づけの参照根拠は、ともかく「自由」なのである。正規就労や離家による「自立」よりも重大だと言わんばかりに、今の若者たちもまた自由人であることを欲している。後期青年期問題を考えるとき、彼ら彼女らを呪縛しているこの自由の問題を避けて通ることはできない。

3.2. 「選択の自由」の限界

四半世紀を隔てて、自由が語られる文脈は、将来どんなこともできるように子どもに今の不自由を強いるというものから、本人自身が今どんなこともできるようにしておきたいと願うものへと、確かに変奏した。しかし両者とも、「ルンペンになる」ことが他と同じような選択肢として心底想定されているわけではなかろう。そして何よりも、「選択の自由」そのものを指向する心性であるという点で、両者は共通している。

自由はひとまず「選択可能性」と定義される。選択は、ある目的を達成することを目指して行われるものであり、その際に開示される選択肢の集合から何かを選び取ること、つまり選択＝決定することを意味する（偶有性の否定）。他方、可能性は、決定のために用意された選択肢の幅であり、「他の選択もありえた」という留保の可能性である（必然性の否定）。したがって、自由には決定と留保の二つの局面が貼り合わさっているのである。

近代社会においては、自己のアイデンティティは与えられ、発見されるものではなく、何かとのアイデンティフィケーション（自己同定）を通して選択され、獲得されるものになった。けれども、選択の自由は、選択肢の幅と分配をめぐる不平等の問題に出会わざるをえない。ライフチャンス(R. ダーレンドルフ)や潜在能力(A. セン)といった選択肢の幅と、その自己選択を実現しうる「効果的自立に必要な資力・資質の分配」、つまり「身にまとうことのできるアイデンティティの数」と、「アイデンティティを選択し、保持する能力」の分配は平等ではない(Bauman 訳書 2001, 43頁)。自己実現の権利は平等だが、実現する能力は平等ではない。にもかかわらず、誰もこの個人化ゲームから降りることはできないのだ。そして今、この不平等は機会や結果だけでなく、個人のアスピレーション（やる気）や希望といった動機づけにも強力に浸潤していつている（山田 2004）。

自由な選択という言い方には、もう一つ重要な論点が内包されている。何かを選択する場合、それを選ぶ基準自体の選択というものがあるに違いない。そうしたいわば選択の選択はいかにしてなされたか、という問題である。当該社会で信憑されている価値や規範、文化資本などがそれにあたるとすれば、選択の自由は第二次的な自由でしかないし、自由に選択したとはもはや言えない（仲正 2003, 佐伯 2004）。選択の自由を論じる場合、どこかの地点で自由を放棄している、あるいはすでに決定された選択によって今選択をしている、というパラドックスを考えざるを得ないはずである。この第二次的な選択の自由が迷走・暴走するのを相対化する究

極の決定者として、大澤真幸(1998)が「第三者の審級の先験的選択」、佐伯啓思(2004)が「超越的な『義』」といったものを想定するのも、この地平においてである。

個人の自由な選択には、このようにもっと重層的な深い問いが背後につきまとうている。にもかかわらず、今日の若者は、そうした個人の選択の自由の「背後にあるものもあえて排除しよう」としているかに見える(佐伯 2004, 283頁)。

…相手の顔をみるとやる気に充ちている。つまり失うものは何もないぞという表情だ。…あのお兄ちゃんのやる気(殺意)は本物だと思った。そして一瞬羨ましい気がしたのも確かだった(三浦 2001, 440-1頁より再引)。

これは、吉本隆明がホームレスの一人にからまれかけた時の体験話である。「失うものは何もない」という根源的な地点を通過する体験とそれへの憧憬・渴望が、青春と青年という語に宿ったとする三浦は、かつて共同体の通過儀礼の中にあったこの体験が近代社会においては外部化され、青春という観念や青年という集団に「再埋め込み」されたのだ、と読み込む。彼はまた、1960年代に「青春」は終焉したと断じ、ほぼ1970年代に入ると同時に、「青年」は「若者」という言葉に、「教養」は「知」という言葉に、ほとんど一挙に置き換えられ、吉本がなお保持している「失うものは何もない」という自由(青春)の幻影も消滅してしまったのだと言う(三浦 2001, 338, 441頁)。まさにそれしか選びようがないという根源的な選択が、なされようがなくなったことこそ、終焉と呼ぶにふさわしいというわけだ。

「失うものは何もない」というラディカルな自由を持ち得ない今の若者にとっては、この切実さは「何も失いたくない」という切実さにとって変わったのではないか。そうだとすれば、何も失わぬままなされる選択は二次的なものとなるほかに、この種の余裕が選択の決定を遅らせ、選択肢の前で佇ませるのかもしれない。フリーターにせよニートにせよ、そうした選択肢の次元にとどまる限り、「邪魔の入らない自由は、裏返せば、とるにたらない自由」であることの証明であり、「自由が許されるのは、その自由が重要でない場合だけだ」(Bauman 訳書 2001, 46頁)ということに気づかないのも当然かもしれない。

今の若者が、「ホームレスにもなれる」という選択肢を持つ自由を、心のどこかで「それこそ自由というものだ」と考えているとしたら、その気になれば金は稼げるといふ「豊かな社会」神話を担保としているに違いない。そして大きな物語が雲散霧消した後の不確実性の時代とは、予見のできない市場の動きがかえって消費の欲望

を活性化するように、選択肢が、そしてこの選択の自由という観念自体が無限に増殖する時代にほかならない。地球規模の危険や社会的不平等といった構造的問題に対処するには、個人化した人間の自己実現能力だけでは不可能であるにもかかわらず、である。

4. 現実への着陸不安

4.1. 「虚構」の時代

個人化の徹底は極私化を促し、初期近代の大きな物語を信憑する状況を次々に解体していく。自己の存在根拠は、自前で調達しなければならなくなる。大きな物語の終焉は、自由をもっぱら自己中心的な「個人の選択の自由」として観念的に純化させつつ、自己決定・自己責任という形で一人ひとりの行動様式を把握していく。こうした自由の個人化が、若者たちのリアリティ構成の現場においてどのように展開するかを次に見てみよう。

戦後の日本社会を、現実という言葉に対する反対語で解読することが可能ではないか、というアイディアのもとに、見田宗介（1995）は「理想」「夢」「虚構」というキーワードで戦後史の変遷を描いて見せた。大澤真幸（1996）にならって簡潔に要約すれば、戦後すぐの「理想の時代」にあっては、理想は実現されるべき将来の現実としてみなされるかぎりにおいて、現実と地続きの可能世界であった。ところが現在、そうした両者の関係は崩れ、現実の理想への変更可能性は信憑されなくなってしまった。東京ディズニーランド、渋谷、映画「家族ゲーム」、健康飲料、オタク、新新宗教など、時代の虚構性を例証する事例は十分である。こうして、本来「反現実」としか規定でない「虚構」性が人びとのもう一つの強靱なリアリティを構成してしまっている、というわけである。これを線形的な変遷とみるかどうか、また現在を脱虚構の時代として新たな第四期に入ったとみるかどうかについては議論があろう（東 2002, 大塚 2004）。しかしここでは、現実の対語であるとの前提と、時代の変化が単線的ではなく積層的だとする考え方にも配慮して、今日の日本社会の基調がまだ見田のいう第三期の「虚構の時代」にあるものと解しておこう。

A. シュッツらの現象学的社会学によれば、「至高の現実」とも称される日常生活の現実とは、われわれを、生命の維持や他者との相互作用を不可欠とした身体性をもった具体的な生活者としてその社会に棲むことを可能にしている次元である。生れ落ちた人間が、まず棲むことになる地平だと考えればよい。また、物質・生命・心の「入れ子構造」的存在としての人間が全的に生きる地平であると言ってもよい（木

下 2002)。これに対して、「飛び地の現実」といったものが点在する。それは、映画を見たり、遊びに夢中になっていたりする時の比較的短時間の現実である。両者がともに人によって生きられる現実である以上、われわれの生きるリアリティが多元的であること、しかしそこにはヒエラルヒーがあることが示唆されている。ところが、虚構の時代とは、このヒエラルヒーのあり方に根本的な揺らぎが生じている時代なのである。

バーチャル・リアリティ、オンライン・コミュニティといった語が日常語化し、現実と虚構の区分をめぐる議論も喧しい。虚構を大文字のリアリティと感じる心性のありようは、重力や身体性に拘束された地勢図とは区別される。身体性の喪失を特徴とするインターネットの世界は、人間の五感が動員される現実とは違う現実を構成している。他者のまなざしから身をかわし匿名性を保持することで、身体的・社会的属性を非重力的・非社会的な次元に縮減できる。比喩的に言えば仮想の「宇宙ステーション」(岩見 1995)に留まっていたいのだ。それは「カプセル人間」(平野・中野 1975)、「洞窟を出ない遊牧民」(Bauman 訳書 2001, 200頁)といった表現をより現代化したものであるとも言えよう。

確かに、情報伝達技術の高度化は個人のインターフェイスを薄く狭くし、ケータイやPCの画面がユーザーのある意味で「視野狭窄」をもたらしている面がなくもない。だが、ここで重要なのは、現実と虚構の混同だとか、取り違えだとかではなく、心によって現実が構成されることは変わらないのであって、変容したとすればそれは心のレリバンス・志向性に求められるべきだということである。いつの時代でも、大文字の社会は実体として不可視なまま、モノや情報や他者のあふれる雑多な世界としてある。いかなる社会にあっても人は、自らの生に「かかわる／かかわらない」という図式の「かかわる」側の半面で生きる。何とかかかわるとするかが、構成される多角的現実の図柄を変える。

現代社会が大文字のイズム、「大きな秩序」や公的領域を保持しにくくなり、個人の集団帰属が断片的・一時的なものになるにつれ、個人はそうしたかかわりのチャンネルを頼らなくなる。結果、「環境」に対して剥き出しにされるという事態が顕在化する。そのとき、心的システムとしての個人の意識は「環境」の縮減を自分本位に成し遂げるよう迫られる。心は原理的に「脳内現象」であり、心を語るのも心である。その心が、とてつもなく複雑になった環境と増大する無知に間断なく対峙しなければならない時代にあつて、心は、こう言ってよければ本来の虚構性(幻想性)を頼りにせざるを得なくなり、以前にもまして「私」という物語を自由という名の

もとに虚構しなくてはならなくなった。これが、虚構の時代における社会化の磁場の一つの様態なのである。

4.2. 離陸不安から着陸不安へ

「大人であれば逃れられない各種の責任や義務のない気軽な若者たちの姿が目立った。離陸する時期がずっと遠くに置かれるようになったのである」「離陸のための気圧が低いため、学生時代が終わった後も、飛び立てなくなってしまう若者が生まれた」(宮本 2002, 16, 22頁)。ここで言われている気圧の低さとは、豊かさを当たり前とし、切羽詰った自立を選択する必要がない「甘え」や「依存」の状態を指していよう。ともすればこのような事態は、離陸困難・離陸不安というふう理解され、不安を取り除き巣からの旅立ちを支援するという馴染みの枠組で若者の今を見ることになる。けれども、虚構の時代にあっては事態は逆転しているのではない。物質的な豊かさを当たり前のように享受する者は、趣味や感性をかかわりの第一原理にした「飛び地の現実」が日常化し(岩見 1993, 166-8頁)、虚構世界で棲息する方に慣れ親しみを感じるというように。

身近な若者たちの自己語りを聞いていると、以前のように「私とは何か」を求めて苦しむというより、例外なく、着地の場所を決めかねて上空での旋回を続けている一人乗り飛行機のイメージがつきまとう。着陸の動機づけの成否を決定するのは、この「居場所」の有無なのである。パラサイト・シングルのありようは、さしずめ空中にしながら家族から給油を受けている図として描かれようが、家族がそうした居場所として積極的に選ばれているわけではない。やはりそこにも、実社会に着陸することの引き延ばしや回避の心性、場合によっては恐怖が、透けて見えるのである。

着地を難しくしている理由にはもっと根源的な事情もあることを忘れてはならない。若者がこの社会には魅力が欠け、しかも良くなる見通しもないと思ってしまうとき、着地を回避したくなるのも道理である。不本意な着地は、当人には妥協や諦念の思いを募らせるだけだ。そしてそれを埋め合わせかのように、現代社会には彼らを魅了するモノ、情報、バーチャルな二次元世界がふんだんに用意されてもいる。身体性・他者性を喪うような消費への、それは誘惑ともなるだろう。他方、サブカルチャーなどの消費的世界にも親和的でない場合は、それは往々にして独我的な非社会的な自由を指向することにもなろう。個人化の徹底によって、自我信仰・自己実現欲求が己を支える唯一の拠り所だとされるとき、「ある者にとっての解放は、別の者にとっての不安である」(Luhmann 訳書 2004, 269頁)し、自分の自由

にとって究極的な障害は他者の自由であると思われるかもしれない。この引きこもりにも通じる感じ方は、他者に囲まれた実社会への着地を「望みたくない、できれば忌避したい」ものにするはずだ。

若者が享受しうるモラトリアムの自由が、自立に向かうことなく、すべてこんな形で消費＝情報化社会のみへの適応や非社会的な性向・態度形成を結果してしまうというわけではない。実際には、幸運にも自己の掲げる具体的目標にそってピンポイントで適所に着地する「勝ち組」もいるし、燃料切れや諦めのために重力に引き寄せられるかのようにどこかに着地する「妥協組」もいよう。しかし多くの若者を包み込む空気には、本格的着地への不本意感が色濃く漂っている。着陸不安は、理想に向かって現実世界を飛び立ち新たな現実を構築しようとする際に抱く離陸不安とは、対照的な心性なのである。

4.3. 目的喪失と自己喪失

すでに論じたように、現代社会が選択の自由として個人の自由をかたどるとき、選択肢の拡大自体が自由だというナイーブな理解をつくりだす。自由は目的とは切り離された選択可能性としてのみ主観の中に保存される。この思い込みは、そのような自由は一旦選択・決定をしてしまうと自由でなくなるというさらなる思いによって上塗りされる。だから、決められない。若者たちが陥る迷宮はこうした自由をめぐるディレンマとして描かれる。

マートンを引き合いに出すまでもなく、手段の獲得可能性・配分のありようが関心の中心になる時代にあっては、手段喪失の不安感がうごめく。ところが、大きな物語が終焉した今、その目的設定自体が個人に委ねられ、関心の焦点は、自らが「もちうる手段の数と、その持続的有効性を念頭におき、リスクを計算しながら、手のとどくあたりに（つまり、獲得可能だという意味で）浮遊する、魅力的な目的のどれを優先するかなのである」（Bauman 訳書 2001, 79頁）。このことは、手段の数を多く持ち、獲得可能性が限られている選択肢を手にして、なお優先の決断を躊躇なくできるものが「勝ち組」に、相対的に差別化効果の少ない手段を手にして相応の獲得可能な目的群では合点したくないと選択を保留しているものを「負け組」にする社会と合わせ鏡になっている。

このことにくわえ、現代の青年現象には興味深い事実も指摘できる。それは、おたくや英才教育を受けた子どもたちのことである。おたくは、ある早い時期に自分の趣味的世界に拘泥し、「自己の偏愛する『文化』のストーカー」（長山 2003, 180

頁)になることを選び取った、その意味で自己決定をしてしまったライフスタイルである。また、いわゆる習い事の世界に早くから親しまされた二世や英才教育の該当者は、目的の他律的決定を受入れ(後に自らの意思によって選び直したと考えられるにせよ)その目的に同化した者である。両者は選択の自由の拡大として描かれる迷宮の世界とその迷子状況から、フライング的に逃れることのできた者たちなのである。現代社会の構造的迷子状況への早期対処を、つまり心的システムの環境「縮減」戦略を、期せずして行い得た者と言ってもよいだろう。

しかし、人生の目的や生きがいを選択=決定することは大いなる跳躍であるに変わりはない。しかも大きな物語を欠いた今、それをそっくり埋め合わすものは見当たらない。この目的喪失の不安感こそが現代人にとって際限ない躊躇と苦悩の原因となっている。「やりたいことが見つからない」という多くの若者たちの強迫的とも言える思いは、明らかにこの時代を実直に引き受けようとする者の迷いなのではないか。なんのために就職や結婚をするのかが定まらないまま、資格取得に走り合コンの予定を入れざるを得ない、可能的選択肢の豊かさを志向する若者たちがそこにいる。目的を自己選択・決定する手前で、自由をもっぱら可能性としてのみ留保する構えが見てとれる。

この目的喪失の不安感と同調するのが、自己喪失の不安である。機能的分化という進化を続ける現代社会は、人間を全体性・統一性をもった存在にすることをきわめて困難にしている。近代の主体性という物語が、断片化する不安定な「私」のありようを前にして大きく揺らいでいることは、誰も否定できないだろう。ルーマン流の言い方をすれば、コミュニケーションシステムとしての多元的な「社会」にペルソナとしてかかわる人格(役割人間)と、心的システムの固有性を担保する方向で当の意識が創出する「私」とのあいだでの、直接的な架橋は不可能である。コミュニケーションによって振舞われる人格とは異なり、「私」はブラックボックスなのである。しかもその「私」は、今日にあっては自らが出会う出来事に曝され続け、たえず流動化するのを抑えがたい。バウマンは言う。——「あらゆる人間は、自分の生活を芸術作品にしようとする」。人生という粗末な材料を使ってこしらえあげた芸術作品は、「アイデンティティ」と呼ばれる。アイデンティティの追求とは、だから、自らが「外見という表皮をめくると、そこはぐずぐずの流体である」ことを必死に隠蔽し、「非形態に形態を与える連続的闘い」とも形容される、自己喪失への不安をしのぐ営みなのである、と(Bauman 訳書 2001, 107頁)。

先述した自己実現という言葉も、そうしたネガを隠したまま焼き付けられ彩色さ

れる写真に与えられた標語だとも言えよう。個性なり自己実現は、その全体性と固有性を前提に夢想される幻想＝物語である。それは現実の社会システムからすれば、機能的にはそれ自体無意味なものである。各機能システムにとって人間は「環境」に過ぎない。例えばファストフードの店員に必要なのは「内心」ではなく、マニュアル化された接客的コミュニケーションなのである。そのような事態が、はっきりかおぼろげかは別にして透視されるとき、自己実現という目標が社会生活においてにわかに達成されると考えることはできまい。なるほど、仕事のやりがいといった言葉も人を着地へと駆り立てはするが、着地を妥協だと思ふ者からすれば、それはむしろ、社会システムに飼い馴らされることの別名となってしまう。離陸された現実の方は、ますます欺瞞と矛盾に満ちた、大人たちの仕切る汚れた世界に見えてくる。

目的喪失と自己喪失の不安感はどうして共振しあい、それが募れば募るほど目的を選択する自由と自己実現を希求する思いを宙吊りにする。組織は不自由だ、自由な時間がほしいといった独白は、着地してしまうことへのためらいの表明なのである。そして、何のための自由か、何を目指しての自己実現かという目的を持つことの困難さは、そのまま現代における成熟困難と重なっていく（斎藤 2003, 199頁）。

5. 成熟論再考

5.1. 未熟なまま大人になること／大人にならないまま成熟すること

大人になる、成熟することを含意する離陸が延期され拒否されるという事態は、大人になるために初期近代が用意した離陸物語が規範力を失ってしまったことを意味する。とすれば、現代社会において人はもはや「成熟」しないのか。いわゆる後期青年期問題の見極めには、成熟概念の再考が不可欠となろう。

例えば、「未熟が^{なま}生にでて、人間の関係のなかでもそれがまったく恥ずかしいことではなくなっている。生なのが、むしろよいとされている」（サントリー不易流行研究所編 2002, 207頁）という奥野卓司の指摘は、カワイイなる語が世間を席卷した光景を想起させるに十分である。前述の目的喪失感と自己喪失感によってもたらされる着陸不安が、幼児化・退行といった心理学的用語で説明される所以である。また、趣味や遊び（とりわけ音楽・スポーツ・二次創作）の価値が突出する時代を反映してか、自分は大人ではないと明言する学生や若者が今や絶対多数を占める。三浦（2003, 382頁）が言うように、教養に置き換えられた知も、修養とか修行という

意味はいっさい含まれておらず、それは趣味の問題になってしまったという感が強い。そこで登場するのが、おたくである。

「おたく」は成熟しない！

誰もが青春の一時期に「世界」と自分の違和感に悩む。それを乗り越えることを成熟と呼ぶ。だが、自分と同じ幻想を共有する「場」があれば、その「場」こそが本当の世界であり現実なのだと思います。成熟する必要がなくなる。…成熟を不要にするこの「場」こそ、「おたく」の正体なのだ！（別冊宝島編集部 1989, 3頁）

前述したような現実社会への着陸ではないけれど、ある種の仮想の「居場所」へと着地することで、未熟なままでいられるというアンチ成熟論である。しかし一方では、おたくが産業社会の担い手として不可欠な役割を演じていることを考えると、彼らは未熟なまま立派に「大人」になっていると言えなくはない。

大人になることと成熟することの不一致は別様にも語られる。その典型が、「大人にならずに成熟する」という物言いである（サントリー・不易流行研究所編 2003, 金原 2004）。社会が承認するところの成長物語を基準として「大人になる」ことが定義されているとしたら、それは変容した身体が伝統的規範によって型嵌めされる窮屈さにも似て、時代錯誤的なものに映るだろう。既存の尺度に囚われることなく、時代と共棲するなかで人として成熟する方途を探ればいい。課題は、型としての大人になることではなく、内実としての成熟にこそある。おおよそこういう議論の立て方である。

大人になること、成熟することを区別することはむずかしい。大人は、社会的な承認／未承認という規範的な区別が生み出すものであり、他方、成熟は、そうした「大人／子どもの区別の上に重ね描きされる価値的な区別」だと、とりあえずは言うことができるだろう（鷲田 2004, 184頁）。しかしながら、これまでみてきたように、機能的分化が進み人間が社会の諸機能システムに多元的に参画するようになり、ライフコースも多様化・流動化するとき、社会が個々の人間を規範的・価値的に区別することは一層困難になる。当然それぞれの境界も揺らがざるを得ない。大人／子どもの区分は、かつての通過儀礼のような社会的承認の制度が明確でなくなった今、曖昧になることは必定である。成年／未成年といった法的な区分も、その曖昧さを便宜的に年齢尺度でかわそうとしているようにしか見えない。例えば、入籍を

しないまま同居している未成年カップルが、それぞれの親にパラサイトしながら、NPO 団体で活動に精出している、といったケースに対して、社会はどう定義するのだろうか。

5.2. 未熟と自由＝成熟可能性

大人、成熟という言葉がともに社会の恣意的な物語でしかないということが透けて見えてしまった以上、規範的区別にも価値的区別にも個人化原理が浸透し、「自己認識のための、心理的な判断基準」（金原 2004, 39頁）に委ねられるほかならう。にもかかわらず、あるいはだからこそ、若者たちの大半は自分を未熟だと規定している。ということは、若者には依然として未熟／成熟図式が「健在」であるということでもある。

未熟さは、居直れるべきものではない。とりわけ、若者自身がそう考えていることを見逃してはなるまい。未熟さは、果てしなく成熟の形を欲望することで意味をもつ、リフレクティブな概念である。未熟さの自覚は他者性を開示し、個人の自由の意味と行使のあり方を鍛え直し深化させるはずである。そうした文脈においてこそ、「分からないことがらを手持ちの分かっていることがらに還元するのではなく、分からないことがらについての感受性をたっぷりもって開きっぱなしになっているというのが、言ってみれば、未熟者の特権なのである」（鷲田 2003, 199頁）という言説の意味合いも、輝きをいっそう増すに違いない。未熟は自由を生み出し、自由が新たな未熟を発見するのである。

近代が終わったわけではなく、現代社会が、近代化＝個人化の論理を引き受けつつ一人ひとりの事実上の自己実現を支援するシステムをデザインするという難問と格闘する途上にあるのだとすれば、個人の成熟にも終わりはない。それも永遠のプロジェクトなのである。例えば「サブカルチャーは、不確定な『私』の一時的な避難所であって、『私』を構築する強制力はない」（大塚 2004, 164頁）と、なおも語らざるを得ないとしたら、近代的な主体＝成熟論の可能性を再構築することが、まずは心的システムを長年自己観察してきた大人たちのしなければならない責務だろう。

「後期青年期問題」の内実は、これまで見てきた現代社会の磁場のどの局面に強く感應するかで、その現れ方も多様である。ただそれらは、後期青年期という時期に固有に存するわけではない。フリーターの若者たちに欠けているのは、時代の「過渡期における早すぎるアクターとして登場してしまったのだという危機意識」なのだとする見方（上西 2002, 74頁）も、そこで終わらせてしまっていていいわけではな

い。現代社会という「環境」に向き合う「心的システム」の自己社会化における困難さとして、すべての同時代人が共有すべき問題なのである。高度消費化＝情報化、液状化、グローバル化、虚構化、格差化が同時進行する困難な時代に生きるわれわれに突きつけられたこの問題を、社会の成熟可能性のありようを見据えながら、まさに熟考することが肝要なのである。

〈引用・参考文献〉

- 東浩紀 2001, 『動物化するポストモダン』講談社。
- Bauman, Zygmunt 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press, (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティー液状化する社会』大月書店)。
- Beck, Ulrich 1996, *Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag, (=1998東廉・伊藤美登里訳『危険社会－新しい近代への道』法政大学出版局)。
- 別冊宝島編集部 1989, 「『お宅』を知らずして'90年代は語れない!」『おたくの本別冊宝島104』JICC 出版局, 1-2頁。
- Bolz, Norbert 1997, *Die Sinngesellschaft*, Econ Verlag, (=1998, 村上淳一訳『意味に餓える社会』東京大学出版会)。
- Coleman, John & Hendry, Leo 1999, *The Nature of Adolescence (3rd ed.)*, Routledge, (=2003, 白井利明他訳『青年期の本質』ミネルヴァ書房)。
- 玄田有史 2001, 『仕事のなかの曖昧な不安』中央公論新社。
- 玄田有史・曲沼美恵 2004, 『ニート』幻冬社。
- 平野秀秋・中野収 1975, 『コピー体験の文化』時事通信社。
- 岩見和彦 1993, 『青春の変貌－青年社会学のまなざし』関西大学出版部。
- 1995, 「若者の生活世界の変貌」日本教育社会学会公開シンポジウム準備委員会編集『電子メディア時代の子どもと若者』, 14-19頁, および当日配布「追加レジュメ」。
- 1998, 「現代日本社会の自己認識－現代社会論の射程」大橋昭一編著『21世紀の大学・企業・社会』関西大学出版部, 37-58頁。
- Jones, Gill & Wallace, Claire 1992, *Youth, Family and Citizenship*, Open University Press, (=1996, 宮本みち子監訳『若者はなぜ大人になれないのか』新評論)。
- 金原瑞人 2004, 『大人になれないまま成熟するために』洋泉社。
- 木下清一郎 2001, 『心の起源』中央公論新社。

- 小浜逸郎 2004,『正しい大人化計画』岩波書店。
- Luhmann, Niklas 1984, *Soziale Systeme*, Suhrkamp Verlag, (=1993・1995, 佐藤勉監訳『社会システム理論 上・下』恒星社厚生閣)。
- 2002, *Das Erziehungssystem der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag, (=2004, 村上淳一訳『社会の教育システム』東京大学出版会)。
- マーブルブックス 2004,『トーキョー・フリースタイルー東京に暮らす49人の「時間」と「お金」』マーブルトロン。
- 見田宗介 1995,『現代日本の感覚と思想』講談社。
- 1996,『現代社会の理論』岩波書店。
- 三浦雅士 2001,『青春の終焉』講談社。
- 宮本みち子 2002,『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社。
- 長山靖生 2003,『若者はなぜ「決められない」か』筑摩書房。
- 仲正昌樹 2003,『「不自由」論ー「何でも自己決定」の限界』筑摩書房。
- 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)編 2004,『日本の青年(第7回世界青年意識調査報告書)』国立印刷局。
- 大澤真幸 1996,『虚構の時代の果て』筑摩書房。
- 1998,「自由の牢獄ーリベラリズムを越えて」『季刊アスティオン』1998ー夏号, TBS ブリタニカ, 68-99頁。
- 大塚英志 2004,『物語消滅論』角川書店。
- 斎藤環 2003,『引きこもり文化論』紀伊國屋書店。
- 佐伯啓思 2004,『自由とは何か』講談社。
- 芹沢俊介 2002,『引きこもるという情熱』雲母書房。
- 城山三郎 1978,『素直な戦士たち』新潮社。
- サントリー不易流行研究所編 2003,『大人にならずに成熟する法』中央公論新社。
- 橘木俊詔 2004,『脱フリーター社会』東洋経済新報社。
- 武川正吾 2004,「福祉国家と個人化」『社会学評論』第54巻第4号, 332-340頁。
- 上西充子 2002,「フリーターという働き方」小杉礼子編『自由の代償／フリーター』労働政策研究・研修機構, 55-74頁。
- 鷲田清一 「いつでも未熟になれる社会」サントリー不易流行研究所編『大人にならずに成熟する法』中央公論新社, 182-200頁。
- 山田昌弘 2004,『希望格差社会』筑摩書房。

ABSTRACT

**The Problem of “Extended Adolescence”
in Japanese Society Today****IWAMI, Kazuhiko**

(Kansai University)

3-3-35 Yamate-cho, Suita-shi, Osaka, 564-8680 Japan

Email: k-iwami@jttk.zaq.ne.jp

Among the so-called “young adult” generation (approximately 20 to 35 years old) there are people who do not (or cannot) find a place in real society, even when they have completed the period of social moratorium. It is certain that this problem of “extended adolescence” is structured by the economic system and labor market of Japan. However, it involves more fundamental issues, which cannot be simply linked back to economic problems.

The aim of this paper is to elucidate the reality of the individual process of “self-socialization” our contemporaries living within their own lifestyles in the extra period of extended adolescence, buried under a postmodern situation characterized by an “unfinished individualization process” and “breaking up of grand narratives or metanarratives.” In that case, there is a group of key words that can provide clues to answering the question, and which are interrelated; they include the freedom of choice, virtual reality, the sense of “fear of landing,” and difficulty of social maturity.

Modern youth tend to hesitate to land in the real world, as a result of the enlargement of the idea of freedom in a land of individual freedom of choice, and the pursuit of pleasure or comfort in a virtual world. However, the youth in question are not simply lazy individuals trying to avoid becoming independent. Although they may be like a magnetic substance completely engulfed in the magnetic field of contemporary society, each one still gropes honestly for a way of living their own lives. We should look within their “immaturity” for clues to promote the increasing maturity of our own society.